

ARTS SAITAMA KITAMACHI



アーツさいたま・きたまちフェスタ 2016・ASK祭

2016年3月18日(金)~21日(祝月)

メイン会場：〒331-0812 埼玉県さいたま市北区宮原町1丁目852-1

さいたま市プラザノース市民広場 (4作品)

さいたま市プラザノース2F交流スタジオ (1作品)

ステラタウン・屋外南西部 (1作品)

島忠ホームズ・屋外北東部 (1作品)

大宮北ハウジング・屋外北西部 (1作品)

大宮北ハウジング・インフォメーションルーム (1作品)

・18日(金)12:00-17:00

・19日(土)9:00-17:00

・20日(日)9:00-17:00

・21日(祝)9:00-17:00

※大宮北ハウジング・インフォメーションルームのみ連日10:00-18:00



國府理 作品 電動三輪自転車

私たちはさいたまトリエンナーレ 2016を応援しています
We support SAITAMA TRIENNALE 2016



SAITAMA
TRIENNALE
2016
さいたまトリエンナーレ 2016

caart!

CAR ART SHOW 2016 in SaitamaCity

アーツさいたま・きたまちフェスタ "カーアートショー2016さいたま"

主催：アーツさいたま・きたまち実行委員会

ASK祭ウェブサイト：<http://c-art-japan.com/ask-sai/>

アーツさいたま・きたまちフェスタが盛大に開催されますことを、心からお慶び申し上げます。
アーツさいたま・きたまちフェスタは市民の皆様が観て楽しめ、気軽に芸術に触れられるイベントです。
現代美術を通じた地域交流とともに、本年開催予定の国際芸術祭「さいたまトリエンナーレ2016」
に向けた現代アートの盛り上がりにも期待しております。アーツさいたま・きたまちフェスタの御成功と、
御来場の皆様の御健勝を祈念申し上げまして、挨拶とさせていただきます。



さいたま市長 清水 勇人

アーツさいたま・きたまちフェスタ(ASK祭)は、さいたま市北区きたまちエリア(プラザノース周辺地域)
における、地域の活性と賑わいの創出を目的とした市民参加型芸術祭です。今年にはパフォーマンス
やワークショップなど多くのイベントを催し、また、現代アート作品がギャラリーから屋外へと飛び出した
ので、芸術祭目当ての方のみならず、ショッピングに来られた方々でも鑑賞出来るようになりました。
“アーツ・さいたま・きたまち”は英語の頭文字を取ると“A・S・K”となります。ここでの“ASK(尋ねる)”
は、作り手と鑑賞者が互いに尋ね合うことを意味しています。祭典期間中は、アーティストたちも会場
に居りますので、気になったことは何でも尋ねてみて下さい。今回は副題を“caaart”(カーアート)とし、
自動車をモチーフや素材にしたユニークな作品ばかりで、会話の糸口も豊富にありそうです。私たちは
はこのお祭りを通じて、現代アート作品を介したアーティストと地域住民との交流を望んでいます。
どうか皆さん、アーツさいたま・きたまちフェスタに是非いらして下さい。

アーツさいたま・きたまちフェスタ代表 飯島 浩二

私たちはさいたまトリエンナーレ 2016を応援しています
We support SAITAMA TRIENNALE 2016



SAITAMA
TRIENNALE
2016
さいたまトリエンナーレ 2016



“方舟 -Where is our sweet home-”



飯島浩二 Koji Iijima



1973年横浜市生まれ。
美術家/CAJ-A.I.R.、IRON∞MAN、ASK祭・代表
1997年武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科卒業。
文化庁国内芸術インターンシップ研修員を経て2006
年まで同大学共通彫塑研究室に勤務。2007年に渡
米し、アメリカ大陸を中心に展覧会やパフォーマンス、
ケーシファイトを展開。2011年文化庁新進芸術家
在外研修を終えて帰国。現在はさいたま市を拠点に地域
とアジア・アメリカ大陸を結ぶアーティストラン・ネット
ワークを拡張している。

“方舟 -Where is our sweet home-”

これは、さいたまトリエンナーレイベント“HOME
BASE Project”で発表した“私たちのスイートホームは
何処”を移動式にした作品。すし詰めの中では、様々
な種類の動物が様々な言語で嘆き、動き続けていく。
シリア難民など移民問題が深刻化する現在、新天地を
求める難民の姿にノアの方舟を準備してみた。



*写真は模型



市川 平

Taira Ichikawa



1965年東京都生まれ。1991年武蔵野美術大学大学院修了。1991年第2回麒麟コンテンポラリーアワード受賞、1993年第3回ジャパン・アート・スカラシップ受賞。1988年「ドームのないプラネタリウム」を制作、それ以降現代的なモチーフを選び彫刻でありながら様々な素材、要素を取り入れ、いわゆるSF的な物語性を感じさせる作品群を作り続けている。近年では「ドームツアープロジェクト」「マジカルミキサープロジェクト」「シークレットガーデンプロジェクト」などの目標達成型アートワークを手掛ける。

“マジカルミキサー2016”

「このプロジェクトは、1989年制作「マジカル・ミキサー」をバージョンアップさせ、公道走行可能なプラネタリウム投影装置を実現する為のプロジェクトです。道のあるところ車の往けるところならどこへでもロケーションを求めて移動ができ、様々なパフォーマンスを可能にします。」



*写真は“暴走花いけ限界チョンマゲ号”



上野雄次

Yuji Ueno



1967年京都生まれ。思春期を鹿児島で過ごす。1986年花道を志す。いけばなや美術の様々な企画展に参加、国内・バリ島・タイなどでも創作活動を展開。工芸家や音楽家などとのコラボレーション多数。2005年より「はないけ」のライブ・パフォーマンスを開始。地脈を読み、モノと花材を選び、いけることの独自の世界を立ち上げている。

“暴走花いけ号 2016新作”

「いけばな」が走っても良いじゃないか！
花いけの限界値を探して彷徨し終着点も見えないまま走り続ける、表現者としての本質的姿勢と作品のコンセプトを重ね合わせた渾身の暴走作品です。



旅する工房SEVプロジェクト



牛島達治 Tatsuji Ushijima



80年なかば頃よりメカニカルな動く作品を制作し始める。初期の頃はそれらを「無用な機械たち」と呼び、そこから表現活動が始まった。活動を進めてゆくなかで興味の対象が手のひらの中の出来事から、身体的な大きさに広がり、やがて建築的なスケールでの出来事へと領域を拡張しながら現在に至っている。美術館やギャラリーといった場所以外にも街の中のコミッションワークや越後妻有の里山などの地域をめぐる展覧会にも関わる事も多い。最近は、移動型の工房の制作とそれを用いた旅へと展開を画策している。

“旅する工房SEVプロジェクト”

SEVプロジェクト、SEVとは、「ソフト・エネルギー・ビヒクル(Soft Energy Vehicle)」の略称である。人力で得るエネルギーを基本として活用し、移動とモノをつくる為の工作機能をあわせ持った乗物の呼称である。この車両を駆使して旅に出る。旅での出来事や歴史、地勢等の多様な事物を知り、相互理解を探る旅の方法として、プロジェクトを進めてゆく。また、私自身、日頃の美術家としての作為性から距離を置くというのも、一つの目的である。



ガレージキットプロジェクト



角 文平 × 田中雄一郎 Bunpei Kado × Yuichiro Tanaka



角 文平: 1978年福井県生まれ。2002年武蔵野美術大学造形学部工芸工業デザイン学科金工専攻卒業

田中 雄一郎: 1978年埼玉県生まれ。2002年武蔵野美術大学造形学部視覚伝達デザイン学科卒業

角 文平 × 田中 雄一郎:

2006年第9回岡本太郎記念現代芸術大賞展

2007年第10回岡本太郎現代芸術大賞展

CENTRAL EAST TOKYO 2007「NIGHT×GALLERY×STREET」
デジタルアートフェスティバル東京2007

“ガレージキットプロジェクト”

実際の車に乗れる状態から手作業で細かく解体していき、最終的には自作のプラモデル箱に解体したパーツ納めていく。その一部始終を俯瞰で撮影した画像全2072カットを順番を逆にして作業終了のカットからつないでコマ撮り映像を制作。制作された映像はあたかもプラモデル箱からパーツを取り出しとんとん車を作っていくように見える。つくる・壊すという対極の行為の中に、なにか新しいものをつくるためのカケラが見つけれられるのではないかと思う。



さいたまスピニングZ



久保田弘成

Hironari Kubota



1974年長野県諏訪郡生まれ。武蔵野美術大学大学院修了。アメ車や漁船、千手観音、バトカーなどをぶん回す作家。国内、テキサス、パリ、ベルリン等で活動。土木建築系総合カルチャーマガジン『BLUE'Sマガジン』表紙モデル。「実話ナクルズ」等に作品掲載。

“さいたまスピニングZ”

2015年秋、熊本県天草市にて80年代の名車 日産フェアレディーZ S130を廻車しました。ファンの皆様からの熱烈なアンコールの御要望にお応えし、Zをさいたま市まで輸送。再演いたします。



電動三輪自動車



國府 理

Osamu Kokufu



1970年京都府生まれ。京都市立美術大学研究科修了(彫刻専攻)。1994年から作品名や展覧会名に「KOKUFUMOBIL」を用い、自動車を素材とした作品などを発表。2008年以降は植物を取り入れた彫刻も手掛ける。京都芸術センター、西宮市大谷記念美術館などで展覧を開催。2014年死去。2016年3月7日から5月9日までギャラリー エー クワッド(東京)にて展覧『オマージュ 相対温室』が開催される。

“電動三輪自動車”

48V-800Wの電動モーターによって走行可能な三輪自動車。自動車メーカーを連想させる「KOKUFUMOBIL」という名称を初めて用いた個展(1994年)で発表された作品である。國府の場合、既製の自動車を素材に使うときにも本来の機能を逸脱させ、その意味を問い直すものが多いが、本作は例外的に実際に走行するという「設計思想」に基づいて制作されている。作者の生前は展覧会場でも実際の走行が行われていた。



ランボルギーニタチバナ



橘宣行

Nobuyuki Tachibana



1966年 大阪生まれ。1992年神戸大学教育学部卒業。1998年KIRIN CONTEMPORARY AWARDにて奨励賞受賞。その後、関西を中心に「アートナウ2000/兵庫県立近代美術館」などで作品を発表し続ける。2004年BEMIS CONTEMPORARY ART (アメリカ オマハ)に滞在制作、海外でも活動する。2011年自らのスタジオを展示会場にする「橘宣行彫刻ランドオープンスタジオ展」を開催。

“ランボルギーニタチバナ”

私の作品は幼少の頃にはまっていたTV漫画や野球、おもちゃなどの「子供文化」にその端を發します。1970年代中盤から後半にかけて起こっていたスーパーカーブームにも私は熱狂していました。当時の日本では高度経済成長がほぼ終焉し、中流程度の家庭にはほぼ一家に一台クルマを所有できるようになっていました。庶民の夢はさらに手が届かない夢の欧州の高級車に向けられたのでした。中でも圧倒的人気を誇っていたのがランボルギーニ社のカウンタックでした。そしてそのカウンタックに私自身が融合しております。



石焼き芋販売車 “金時”



ヨタ

Yotta



“ヨタ(Yotta)”は、木崎公隆・山脇弘道からなる現代アートのユニットです。2010年結成。2010年“六本木アートナイト2010”(＠六本木ヒルズ)にて「金時」発表。2011年“おおさかカンヴァス2011”にて「花子」発表。2012年“六本木アートナイト2012”(＠東京ミッドタウン)にて「花子」出展。第18回岡本太郎現代芸術賞 岡本太郎賞受賞。

“石焼き芋販売車 金時”

石焼き芋販売車の作品。徳島県産の鳴門金時・里むすめを、古くから伝わる石焼きの技法によって美味しく焼きあげ、路上で販売しています。表現の可能性と、曖昧さ、多様である事を、公共空間、ストリートから、問う作品です。

自動車と〈キャンプ〉

本展の企画者である(出品者の一人でもある)飯島浩二からこの話を最初に聞いたとき「飯島らしいな」と思った。そこにはふたつの意味がある。ひとつは自動車を素材やモチーフとした美術作品を屋外に展示することについて、もうひとつは展覧会の名前のつけ方についてである。

飯島は公共空間の意味に介入するパフォーマンスを得意とするアーティストである。ロサンゼルス¹のチャイニーズ・シアター前にある、ハリウッドスターの手形・足形のプロックタイルの中に、自分の手形・足形のを勝手に持ち込み撮影した《“HOLLYWOOD JACK”-Chinese Theater-》はその特徴をよく表わす。そして、その特徴は、ホワイトキューブを会場とする展示でも何ら変わるところはない。その結果、美術という文脈を逸脱してしまう危機感=批評性が発生することになるのだ。

ちなみに、20世紀を象徴する自動車を美術史の中から探し出すのはそう難しいことではない。テクノロジーを礼賛し、疾走する自動車をサモトラケのニケよりも美しいと語ったマリネッティ『未来派宣言』(1909)。機械化され、工業化され、広告で満たされた都市空間を「新しい自然」と捉えたレスタニー『ヌーヴォー・レアリズム宣言』(1960)。その隣りには、有用性のない機械の動きを導入したティンゲリーや、自動車を大型プレス機で圧縮したセザールがいた。アメリカのポップアートやスーパーリアリズムの絵画でも自動車は頻りに登場するモチーフだ。近年ではガブリエル・オロスコやエルヴィン・ヴルムなどの仕事もよく知られている。しかしながら、本展をこうした歴史に接続することは必要だとしても十分ではない。飯島の場合、美術という自明さが最初から失効しているからである。

したがって、本展において屋外という展示場所が選定されたのは、それほど特別な話ではない。単純に、自動車は元々が屋外にあるというだけのことである。美術作品を公共空間に展示する場合、美術と日常の接点について論じられるのが一般的だが、今回はそうではない。彼にとって、美術と日常は元より切り離されていないのだ。

そうした特徴は、彼の選定した本展の出品アーティストの仕事にも重なり合ってくる。既成の自動車を意表を突くかたちで用いる上野雄次やYOTTA。少年の遊び心をそのまま拡大して実行した市川平や角文平×田中雄一郎。自動車の動くメカニズムを還元的に考察した牛島達治や國府理。そもそもの自動車の機能や意味を完全に脱臼させている久保田弘成。さらには、これを自動車との関連で語らなければならないのかもよく分からない橘宣行。彼らの仕事は多様だが、そのどこかに飯島の仕事と通底するものを含んでいる。

その感覚とは、おそらく、スーザン・ソントグが〈キャンプ〉と呼んだものに一致する。それは、基本的には都会的・人工的なものであり、誇張されたものや《外れた》もの、ありのままでないものを好むことを指す。いわゆる良い趣味のことではない。「ひどすぎる」「途方もなさすぎる」「信じられない」というのが、キャンプ的なほめ言葉の決まり文句だからである。本展の出品アーティストが共有するこうした感覚は、スタイルに限定されるものではなく、素材やモチーフとして自動車を選択したことにも関与する。20世紀の社会を象徴した自動車を21世紀の現在に取り上げるという乖離した距離感こそが、彼らの〈キャンプ〉な感覚を裏打ちするのである。

もうひとつ、展覧会の名称についてだが、ここにも飯島の〈キャンプ〉な感覚が発揮されている。アルファベットで記される「show」は美術展覧会にも普通に用いられるが、カタカナ書きされた「ショー」は、どちらかというと、見世物を指し示すことが多い言葉だ。美術の文脈を逸脱していく飯島が用いるのだから、その意味で受け取るの方が自然だろう。自動車をを用いた美術作品を屋外展示することは、こうした意味合いに接続される。本展を美術史の中だけで理解することが、必要ではあっても十分でない理由がここにある。

明治期に欧米から輸入された美術という概念は、最初から高尚な文化として受け入れられたわけではない。木下直之が指摘するように、全く未知の概念を導入するにあたって、江戸時代から続く見世物の伝統に接続することでようやく受容可能になったのだ。当然のことながら、そのような起源はすぐに忘却される。制度の確立にはそうした忘却が不可欠だからである。もちろん、本展は日本の近代美術の起源の考察を意図したものではない。ただ、ここにある〈キャンプ〉な感覚がそうした隠蔽された起源を露呈させてしまうのだ。

このように考えるならば、この企画はここでは終了できないことになるのではないか。自動車である以上は、どうしても公道に出る必然性が生まれるはずだからである。そのときに、本展の〈キャンプ〉という感覚がより明確に開示される気がしている。

EVENT

◎ ワークショップ：橘宣行「自分だけのアートカーをつくろう！」



- ・混ぜこぜのプラモデルパーツを組み合わせて、オリジナルアートカーをつくろう！
- ・3月19日(土)、20日(日) /13:00-17:00 (一日先着約20名)
- 場所：大宮北ハウジング・インフォメーションルーム (室内)

牛島達治「人力による移動型工房の試乗と工作の体験」

- ・“移動型工房SEV”の上で屋外工作をしたり運転したりしてみよう！
- ・3月19日(土)、20日(日) /12:00-17:00、21日(祝) /10:00-14:00 (一日先着約20名)
- 場所：プラザノース前市民広場 (雨天中止)

★参加費無料

◎ パフォーマンス：飯島浩二「私たちのスイートホームはどこ？」@大宮北ハウジング・屋外北西部①

- ・“方舟”車中の動物たちが豪快に一斉始動します！
- ・3月19日(土)、20日(日) /12:00-16:00、21日(祝) /10:00-14:00



上野雄次「花いけライブ」@プラザノース市民広場③

- ・花いけバトルの上野雄次が車上に花を生けます！
- ・3月21日(祝) /12:00-

久保田弘成「さいたまスピニングZ」@ステラタウン・屋外南西部⑥

- ・80年代の名車フェアレディZが高速大回転します！
- ・3月20日(日) /17:00-、21日(祝) /14:00- (雨天中止)

YOTTA「やきいも金時」@島忠ホームズ・屋外北東部⑨

- ・ステラタウンで行う抽選会の当選者に、美味しいやきいも100本を配布します！
- ・3月19日(土)、20日(日) /12:00-16:00、21日(祝) /10:00-14:00

★参加費無料

◎ トークセッション：『“caart”クルマとアート』 場所：プラザノース2F・多目的ルーム

- ・3月20日(日) /18:00-19:40
- 司会&パネリスト：藤井匡(東京造形大) & 飯島浩二(ASK) & 市川平
- パネリスト：久保田弘成、木崎公隆・山脇弘道(YOTTA)、今田潤(スバル興産)、神保匠吾(DRIVETHRU)



『地域社会×アート×???』 場所：プラザノース2F・多目的ルーム

- ・3月21日(祝月) /15:00-16:40
- 司会&パネリスト：藤井匡(東京造形大) & 飯島浩二(ASK) & 市川平
- パネリスト：上野雄次、牛島達治、角文平×田中雄一郎、橘宣行

★参加費無料

MAP

プラザノース周辺図



さいたま市プラザノース

〒331-0812 埼玉県さいたま市北区宮原町1丁目852-1
 電話番号：048-653-9255 / FAX：048-653-9288
 地図アクセス：<http://www.plazanorth.jp/access/access.php>

■電車

- ・埼玉新都市交通伊奈線・ニューシャトル「加茂宮駅」下車、徒歩約5分
- ・IR東北線(宇都宮線)「土呂駅」下車、徒歩約15分

■バス

- ・コミュニティバス「北区役所線」北区役所下車
- ・JR大宮駅路線バス「上尾行き」「上尾車庫行き」北区役所下車

■自動車

- ・JR大宮駅より旧中山道上尾方面に約3km(北区役所交差点右折)
- ・JR宮原駅より旧中山道大宮方面に約1.6km(北区役所交差点左折)
 ※駐車場2時間無料(混み合う場合があります。)
 ※ステラタウン、島忠ホームズ駐車場もご利用になれます。

①飯島浩二作品

②市川平作品

③上野雄次作品

④牛島達治作品

⑤角文平×田中雄一郎作品

⑥久保田弘成作品

⑦國府理作品

⑧橘宣行作品

⑨YOTTA作品